四　ペトロのキリスト告白

マタイによる福音書　十六章十三節―二十八節

二〇〇九年三月十五日礼拝説教　　秋吉隆雄　牧師

今日は受難節に入ってから三回目の主の日の礼拝です。この日に与えられた御言葉は、マタイ福音書十六章、ペトロがイエス・キリストに「あなたはメシア、生ける神の子です」とキリスト告白をした箇所です。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書は、イエス・キリストの生涯を記して、イエス・キリストを人々に伝えようとしています。そのイエス・キリストの生涯は、歴史的事実というよりは、信仰の目を通して見た、イエス・キリストの生涯を記したものと言った方が正確でありましょう。

そのイエス・キリストの生涯は大きく二つに分かれます。前半は、ガリラヤ湖周辺で神の国の宣教に当たられた時期です。悩み苦しむ者に対して、確かな慰めと励ましを語り続けました。また、心と体を病む者に対して、癒しと解放を与えて、「神は今ここに働いておられる。神によって生きよ。神はあなたがたを祝福してくださっている」と、神の国のリアリティを鮮やかに示されました。民衆は、このイエス・キリストを慕い、イエスはいつも群衆に取り囲まれていました。失われた者たちが回復して、共に生きることがどんなに喜ばしいことか。人間の尊厳が守られることがどんなに素晴らしいことであるか。この福音が示されたガリラヤ時代が前半です。

そして後半は、十字架で死ぬ決意を持って決然と都エルサレムに上られます。そして、そこでエルサレム神殿当局と激しく、また厳しく対決して十字架の苦しみと死へと向かわれる。このイエス・キリストの受難が後半の部分です。初期のガリラヤ時代と、後半の受難の時代と二つに分けられますが、今日与えられましたペトロのキリスト告白は、その分岐点に位置するところです。ガリラヤからエルサレムに向かう、ちょうど曲がり角が今日与えられた御言葉です。今日はこの箇所から申し上げたいと思います。

マタイ福音書十六章十三節から二十節まで、まず前半をご覧いただきたいと思います。これはガリラヤ時代の終わりです。十三節から。

イエスは、フィリポ・カイサリア地方に行ったとき、弟子たちに、「人々は、人

の子のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。弟子たちは言った。『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤだ』と言う人もいます。ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた。すると、イエスはお答えになった。「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。わたしも言っておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」それから、イエスは、御自分がメシアであることをだれにも話さないように、と弟子たちに命じられた。

ガリラヤで神の恵みを分け合った時代は終わった。イエス・キリストは弟子たちへの教育の時が終わったことを知られます。弟子たちを伴ってフィリポ・カイサリアに向かいます。この地は、ガリラヤ湖の北四十キロぐらいの所にある、ヘロデ・フィリポが統治していた町です。ローマ皇帝の大きな像やギリシャの神々の像、また、ここは交通の要所であったそうで、様々な宗教が入り込んでいた土地でした。イエス・キリストは、諸々の宗教が混在するフィリポ・カイサリアに弟子たちを伴って、彼らにまずこう問いかけます。「世の人々は、人の子、わたしのことを何者だと言っているか」と問います。それに対して弟子たちは、「あなたのことを、殉教した洗礼者ヨハネだと言う人がいます」、また、旧約聖書の中で、最も尊敬されていた「預言者エリヤだと言う人もいます、悲劇の預言者エレミヤだとか、あるいは預言者の一人だとか、そう言っています」と答えます。洗礼者ヨハネ、エリヤ、エレミヤ、預言者の一人、これは誰も「宗教者として最高に評価しています」という答えです。イエス・キリストのガリラヤでの力ある言葉としるしは、民衆からこのような尊敬を得ていたことは容易に想像されます。ファリサイ派の人々からは、敵対視され、迫害を受け続けていましたが、彼らのイエス・キリストへの評価は口にしていません。イエス・キリストは、弟子たちから世の人の自分に対する評価を聞いた後、今度は弟子たちに対して、「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と問います。

ガリラヤ伝道は、どれくらいの年月であったか意見が分かれています。この間、イエス・キリストの弟子たちは、目の前で神の国のリアリティを見てきました。

打ちしおれている者が、イエス・キリストの言葉によって立ち上がる。病む者が癒される。イスラエル共同体の中に回復できる喜ばしい人間解放、今、神はここに働いておられるということを、目の前に見てきたのです。「そのあなたがたは、わたしを何者だと言うのか」とイエス・キリストは弟子たちに主体的な、責任的な応答を求められました。「人の評価ではない。あなたがたはわたしをどう思うか」と聞いたのです。それに対して、例によってペトロがまず答えます。「あなたはメシア、生ける神の子です」。メシアはヘブライ語で、ギリシャ語で言うならばキリスト、日本語で救い主です。ペトロは、「あなた、イエスはキリスト、救い主、生ける神の子です」と告白したのです。

キリスト教の信仰は、ナザレのイエスはキリスト・救い主です。アーメン、本当です。「イエス」「キリスト」「アーメン」この三つの言葉に要約されます。「イエスはキリストである」とペトロは告白したのです。このペトロのキリスト告白がマタイ福音書の分岐点です。このペトロの告白は、彼の信仰、思いのすべてであったと思います。彼は、全身全霊をこめてイエス・キリストに従っていました。その追従の中で、この方はキリスト・救い主であると信じていたのです。ペトロの告白を聞いて、イエス・キリストはペトロに言います。「シモン・バルヨナ」、ペトロのヘブライ名はシモンです。バルヨナは、ヨナの子という意味です。ですから「ヨナの子シモン、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」と言っています。イエス・キリストは、ペトロが「あなたは、メシア、生ける神の子です」と告白したその告白に対して、「それは人間ではなく、神が現したのである」と言っておられます。

イエスをキリストと信じて告白する。この信仰は、神の業です。パウロは、「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです」と書いています。聖霊が、神の霊が、イエスは主キリストであると告白させると言っています。また、ヨハネの手紙では、「イエスがメシア、キリストであると信じる人は、みな神から生まれた者です」と書いています。「イエスはキリストだ」と信じる者は、神から、人からではなく神から生まれた者だと言っています。ペトロのキリスト告白を、神の霊、神から示された信仰であると、イエス・キリストはペトロに話しておられます。ここが興味深いところです。

イエス・キリストは、「人はわたしのことを、洗礼者ヨハネ、エリヤ、エレミヤ、あるいは預言者の一人と言っている。それでは、あなたがたは、わたしを何者だ

と言うのか」と主体的な責任的な応答を求められました。それに対してペトロは、まさに主体をかけて「あなたはメシア、生ける神の子です」と応答しました。ところが、そのペトロの告白、応答は、神様が導きだされたというのです。わたしたちの信仰の告白は、わたしの決断、わたしの実存をかけた神への応答であります。しかし、その人間の決断的応答も、神の御手の中にあるというのです。神の導きの中に人間の真の主体がある。これが神信仰です。全能の神様に生かされ、神の憐れみの中にある。ですから、ペトロは幸いなのです。ここに信仰の神にある確かさがあります。このことは大変重要なことです。この後、イエス・キリストは、ペトロに言います。「あなたは、ヘブライ語のシモンである。しかし、あなたはこれからはペトロである」。ペトロはギリシャ語で「岩」という意味です。「あなたはペトロ・岩である。わたしはこの岩・ペトロの上に教会を建てる。その教会は、どんな力も、死者の集まる陰府の力でも対抗できない。わたしイエス・キリストは、ペトロに天の国の鍵を授ける」、天と地をつなぐ鍵を授ける。ペトロが地上で「ＹＥＳ、よろしい」と言えば天国でも「ＹＥＳ」となる。ペトロが地上で「ＮＯ、いいえ」と言えば天国でも「ＮＯ」となる。そのような権能をペトロに授けると語っています。この言葉がカトリック教会の教会観を決定づけています。ペトロの絵や彫刻では、彼は必ず大きな鍵を持っています。この鍵を持つペトロの上に教会が建てられた。ですから、ペトロは初代の教皇です。キリストの赦しの権能を授かって、天と地をつなぐ鍵を持っています。この初代教皇のペトロから、現在の二百六十五代目の教皇ベネディクト十六世まで、綿々と続いています。キリストの代理者として立てられた教皇が頂点にいて、完全なヒエラルキー体制で築かれています。カトリック教会は、教皇から認証された司祭、神父がいるところが即、教会です。それは、ペトロの上に教会が建てられたからです。しかし、このマタイ福音書の記述は、明らかにイエス・キリストご自身の言葉ではないでしょう。なぜならば、教会、エクレシアという言葉は、後世の信仰者たちが作った言葉であって、イエス・キリストは、このエクレシアという言葉は知らないし、使っておられません。ということは、この部分はマタイ福音書が書かれた時代に、彼らの教会の中で使われた言葉に間違いないのです。この言葉によって、自分たちが作り上げている教会が、どのように建てられているかということを権威づけたのです。権威づけるために、イエス・キリストの口に乗せて、教会をしっかりしたものにしようという目的の下にこの言葉が記されています。

プロテスタント教会は、ペトロの上に建つ教会ではなくて、ペトロが「あなたはメシア・キリストです」と告白した「キリスト告白がなされている所が教会」と理解したのです。イエス・キリストは、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」と言われました。「キリストの名によって、キリストを信じる者の共同体」がキリストの教会である、とプロテスタント教会は受け止めたのです。この問題に関しては、今日は申し上げません。いずれにしても、ここまでがイエス・キリストのガリラヤ伝道の終わりです。ペトロのキリスト告白で当初の目的は達成された。これが前半の部分の締めくくりです。

後半の「受難」へと進んでいきます。二十一節から二十八節までをご覧いただきたいと思います。

このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」イエスは振り向いてペトロに言われた。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」それから、弟子たちに言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである。はっきり言っておく。ここに一緒にいる人々の中には、人の子がその国と共に来るのを見るまでは、決して死なない者がいる。」

「このときから」、すなわちペトロがキリスト告白をした時から、イエス・キリストはこれから先に起こることをはっきりと語られました。それは、今からエルサレムに上る。そこで長老、祭司長、律法学者たち、エルサレム神殿の権威ある宗教家たちから苦しみを受け、殺される。しかし三日目によみがえる。イエス・キリストは、十字架の死と復活の命の予告を初めて弟子たちに語られました。すると、一番先にものを言い、一番先に行動するペトロが、イエス・キリストをわ

きへお連れしていさめ始めたというのです。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。そんなことを言ってはなりません。」とイエス・キリストの発言をさえぎったのです。このペトロの言葉に対し、イエス・キリストは「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている」と大変な叱責をされました。私はこのところが大変興味深いと思いますし、ここがキリスト教信仰を分けるところだと思います。

ペトロは、イエス・キリストから「わたしを何者だと言うのか」と問われた時に、「あなたはメシア、生ける神の子です」とキリスト告白をしました。この時のペトロの心に偽りはなかったでしょう。全くペトロはイエス・キリストを信じて告白しているのでしょう。しかし、ペトロが告白したキリストは、ガリラヤ宣教で素晴らしい言葉としるしを示された、力あるイエスであったのです。ペトロにとってキリスト、救い主は、力ある栄光の神であったのです。それに対してイエス・キリストは、「十字架で死ぬ。宗教的権力者によって抹殺される。しかし、そこから復活して神の命を約束する」と、語っています。ここでは栄光の神ではなくて、敗北の神が語られています。しかし、その敗北の中から神の命が啓示されると言っています。イエス・キリストの十字架と復活の予告を理解できる人はいないでしょう。ペトロがイエス・キリストをわきへ引き寄せ、「先生、そんなことを言ってはなりません。誰からも信用されません」とたしなめることは当然です。ここに、ペトロが求めた栄光のキリストと、キリストが指し示す、死に至るまで人間に仕えるキリストの間には、天と地ほどの違いがあります。私はここに十字架の躓きがあると思っています。

ヨーロッパに行きますと、鍵を持つペトロ、そして剣を持つパウロ、そしてそこに教会があります。私には、それらの教会は栄光の教会に見えます。少なくとも、福音書が記述しているキリストの福音とは違うでしょう。小井沼先生から紹介された堀江節郎神父は、今年からまたブラジルに戻って宣教しておられます。何年前でしたか、東ティモールの宣教を任命されて東ティモールに行かれました。その時に、先生は私に「東ティモールに行って、神学生たちに神学を教えます。そこで、どんなイエス・キリストを教えるか、それによって、東ティモールのキリスト教会が決まっていきます」と言われました。この言葉は、栄光のキリストを伝えるならば、人々を支配する、みんなの上に君臨するキリストの教会になる。けれども、人に仕え、命を注ぎ出したイエス・キリストを伝えるならば、東ティ

モールの教会は、人々に信頼される教会になる。そういう意味合いの言葉として聞きました。

ペトロは、当然ながら人間のことを思っていました。栄光のキリストを期待し、死んでよみがえるキリストなどは、頭の中に全くなかったのです。ですから、イエス・キリストは、メシア・キリスト理解がまったく違うのですから「わたしがメシアであることをだれにも言うな」とペトロを制止されたのでしょう。神が人間に示されるキリスト、救い主は、十字架で死んで神様との和解を実現し、そして復活して神の命を鮮やかに啓示し、その命をわたしたちに約束するキリストです。ガリラヤでの神の国の宣教が終わって、十字架に向かう受難が始まる最初に、栄光のキリストを求めるペトロに対して、「サタン、引き下がれ。あなたは神の道、救いの道を邪魔する者であって、あなたは神のことを思わずに、人間のことを思っている」という言葉から始まっています。そしてイエス・キリストは、弟子たちに「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい」と言われます。イエス・キリストに従いたい者は、まず自分を捨てる。これは文字通り自己否定でしょう。自分の欲望、願望を捨てる。そして自分の十字架を背負う。十字架というのは、他の人のために受ける苦しみ、苦難です。これを、自分の十字架として負う。そして三つ目、「わたしに従いなさい」。これは、「信じて従い続ける」という継続的な信従です。この三つの命令を弟子たちに語られました。

このイエス・キリストの命令に従うことのできる人はいない。一人もいない。イエス・キリストが、エルサレム神殿当局から殺される。十字架にかかって死ぬ。このことを話された後、「そのわたしに従いなさい」と言われたのです。イエス・キリストの十字架の救いに、真に与る者だけが、イエス・キリストの命令に、あるいは従うことができるかもしれません。ペトロは、キリスト告白をいたしました。しかし、それはまるで方向違いであったわけです。けれどもその後、ペトロはイエス・キリストの十字架を知り、赦しを知って、キリストの復活の命に与っています。その時、ペトロは新しい人間として、キリストに従う者とさせられていきました。彼は、六十年代、都ローマでイエス様と同じ十字架では畏れ多いと、「逆さ十字架にかけてくれ」と願い、頭を下にして十字架で殉教したと言われています。ペトロはまさに自分を捨て、自分の十字架を背負って、イエス・キリストに従い続けて死んだ弟子です。イエス・キリストは、最後に「自分の命を救い

たいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る」と語っておられます。十字架で命を失う。その者に復活の命が与えられる。これを弟子たちに約束しておられます。

わたしたちは、イエス・キリストが語られた命令、この約束に対して、どのように立ち向かうか。「私は十字架を負います」などと言うことはとてもできない。けれども、私のために、イエス・キリストは十字架で死んでくださった。私のために、イエス・キリストはよみがえってくださった事実を信じる時、わたしたちはキリストのために生きようとする、新しい生き方に導かれて行く。このことに望みをかけて生きる。これがわたしたちに与えられている信仰だと、私は信じています。そこにキリストが約束してくださっている救いが、わたしたちのものになっていくと信じています。